

並行する警告 - 第一号

イエス・キリストの啓示：人類への最後の警告を理解する

Jeff Pippenger

2023-08-08

「イエス・キリストの黙示」は、「時が近い」ときに神の民に開かれる。人類への最後の警告メッセージは、人間の猶予期間が終わろうとする直前に与えられ、その最後のメッセージは聖書のいくつかの預言の箇所では表されている。黙示録14章では、その最後の警告メッセージは三人の天使によって表されている。

そして私は、もう一人の御使いが天の中空を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む者たち、またあらゆる国民と種族と言語と民に宣べ伝えるための永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を畏れ、神に栄光を帰せよ。彼の裁きの時が来たからである。天と地と海と水の泉を造られた方を礼拝せよ。」

そして、続いて別の天使が言った。「大いなる都バビロンは倒れた、倒れた。彼女が自分の淫行の怒りのぶどう酒を、すべての国々に飲ませたからである。」

第三の御使いも彼らに続いて、大声で言った。「だれでも獣とその像を拝み、その額か手にその刻印を受けるなら、その者は神の怒りのぶどう酒、すなわちその憤りの杯に薄められずに注がれたものを飲み、聖なる御使いたちと小羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。彼らの苦しみの煙は世々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者、またその名の刻印を受ける者は、昼も夜も休むことがない。ここに聖徒の忍耐がある。ここに神の戒めを守り、イエスへの信仰を保つ者たちがいる。」 黙示録 14:6-12。

ヨハネの黙示録第十八章では、まさに同じメッセージがバビロンの滅びを告げている。

この後、私は、もう一人の天使が大いなる権威を帯びて天から降りてくるのを見た。地はその栄光によって輝いた。彼は力強い声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪霊たちの住まいとなり、あらゆる汚れた霊の巣窟、また、あらゆる汚れて忌み嫌われる鳥の檻となった。」なぜなら、すべての国々は彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女のぜいたくの豊かさによって富を得たからである。さらに、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずかることのないように、また、その災いを受けないように。」彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不法を覚えておられるからである。ヨハネの黙示録 18:1-5

予言的歴史の流れ、言い換えれば、第18章でその栄光により地を照らす天使が象徴する一連の出来事は、裁きの終結と猶予期間の終結、そして最後の七つの災いへと至る過程を示している。第18章に示される予言的歴史は、第14章の三人の天使によって示される予言的歴史の流れと「並行」している。

神は、黙示録14章のメッセージに預言の系列の中での位置を与えられ、その働きはこの地の歴史が終わるまで止むことがない。第一と第二の天使のメッセージは今の時にもなお真理であり、後続くものと並行して進むべきである。第三の天使は大声でそ

の警告を宣言する。「この後」とヨハネは言った。「私は、大いなる権威を持つ別の天使が天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」この輝きの中に、三つのメッセージすべての光が結集している。『The 1888 Materials』 803、804。

第十四章の天の中空を飛ぶ三人の天使は、獣の刻印と猶予期間の終了で締めくくられる、全世界に向けたメッセージを象徴している。第十八章では、その天使の栄光によって全地が照らされ、そのメッセージもまた猶予期間の終了で終結する。

第十四章で三人の天使によって象徴的に示されているメッセージと、第十八章で降りてくる天使によって示されているメッセージは、同じ警告メッセージの二つの表現である。聖書には冗長なものは何一つなく、無駄もない。まったく同じメッセージがヨハネによって一度ならず示されているという事実は、そのメッセージの重要性を強調しており、「繰り返しと拡大」と呼ばれる聖書的規則、すなわち神の教え方を例証している。予言的歴史の二つの筋を合わせて考えると、もう一方から切り離して単独で見るとどちらの筋でも認識されない真理が明らかになる。今日、同じ出来事の証人を二人法廷に呼んだとしても、彼らは政治的・社会的イデオロギーに基づいて正反対の報告をするかもしれない。だが聖書の証人についてはそうではない。彼らは常に一致しており、もし一致していないように見えるなら、あなたの見方のどこかが誤っているのである。

私たちが取り上げている二つの例証は、マラキ書が預言者エリヤの帰還として提示しているのとまったく同じ警告メッセージである。三つのメッセージはいずれも恩恵期間の終わりに先立って到来する。というも、これら三つの預言の系列に含まれる警告は、単に恩恵期間の終わりに先立って与えられるだけではなく、各警告の焦点、言わば主題そのものが恩恵期間の終わりだからである。実際、どの預言者によって警告が宣べ伝えられたり例証されたりするにしても、それは黙示録14章と18章、そしてマラキ書のエリヤの預言と同じ警告である。

これら三つの預言の筋道は、互いに並行していることを容易に示すことができる。とはいえ、聖書の預言における情報の主要な源は二つある。一つは、世の終わりに展開する出来事の順序を特定すること。もう一つは、将来の出来事を概説するメッセージに関連する預言者たちの活動の描写である。

これらの考えに関して検討に値する規則が二つある。第一は、すべての預言者は世の終わりについて語っており、そこでは猶予期間が閉じられるということだ。

「古代の預言者たちは、それぞれ自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちのために語ったのであり、したがって彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『これらの事は皆、彼らに対する戒めとして起こり、それが書き記されたのは、世の終りに臨んでいる私たちへの訓戒のためである。』第一コリント10:11。『彼らが仕えたのは自分たちのためではなく、あなたがたのためであって、その事どもは、今や天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのである。御使いたちもそれらの事をうかがい見たいと願っている。』第一ペテロ1:12。…」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会

において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

聖書のすべての預言的メッセージは、『世の終わりが及んだ』私たちに『適用される』。その規則は、聖霊が『預言の授与においても』および『描写された出来事においても』『形づくった』『事柄』を特定する別の規則と相まって、いかなる預言においても、預言の冒頭にある預言的出来事が、その預言の終わりにある預言的出来事を型として示し、かつそれと並行して進むという主張をいっそう強化する。

神の御言葉を、いっそう綿密に研究する必要がある。とりわけ、私たちの働きの歴史においてこれまでになく、ダニエル書と黙示録に注意を払うべきである。ローマの権力と教皇制に関しては、ある点では語ることが少なくなるかもしれないが、神の聖霊の靈感のもとに預言者と使徒が記したことに注意を喚起すべきである。聖霊は、預言が与えられることにおいても、描かれた出来事においても、人間の器は表に出ずキリストに隠され、天の主なる神とその律法があがめられるべきことを教えるよう、事柄をそのように整えてこられた。ダニエル書を読みなさい。そこで示されている諸王国の歴史を、順を追って一つひとつ取り上げなさい。牧師たちへの証言、112。

「聖霊は、預言が与えられることにおいても、描かれた出来事においても、事柄をそのように形作ってこられた。」 「『預言が与えられることにおいても、描かれた出来事においても』、『事柄』は『聖霊』によって『そのように形作られた』ので、『預言が与えられること』と『描かれた出来事』の双方が靈感によるものとして認められ、世の終わりの預言的な描写に適用されるべきである。」

ジョンはガブリエルから予言を授かり、それを書物に記して諸教会に送るよう告げられた。その時期、彼はローマから迫害を受け、今日の世界で「ブラックサイト」と呼ばれるようなものに相当する形で流刑に処された。当時ジョンは、グアンタナモ湾の囚人に匹敵するほど人間社会から隔絶されていた。

ヨハネは、その幻が、主の日である第七日の安息日に礼拝していたときに起こったことを明らかにしている。

なぜなら、人の子は安息日の主でもあるからである。マタイによる福音書 12:8。

御霊にあって礼拝しているとき、彼は背後から大きな声を聞いた。

私はヨハネ。あなたがたの兄弟であり、患難と、イエス・キリストにある御国と忍耐において、あなたがたと共にある者である。私は、神の言葉とイエス・キリストの証のために、パトモスと呼ばれる島にいた。私は主の日に御霊にあって、背後にラッパのような大きな声を聞いた。その声は言った。「わたしはアルファでありオメガ、最初であり最後である。あなたが見ることを書物に書き、アジアにある七つの教会、すなわちエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアティラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキアに送りなさい。」黙示録 1:9-11。

ヨハネについて、彼の周囲と示された状況は、彼を、第七日安息日を守る者であるために迫害されている者として、また聖書とエレン・ホワイトの著作の双方を信じているために迫害されている者として描いている。これが「イエスの証し」である。彼は背後に大

きな声を聞き、その声を見ようとして振り向くが、そのことによって、彼は世の終わりにいるセブンスデー・アドベンチスト、すなわち背後から「これが道だ。この道を歩め」と語る声を聞く者を象徴している。

すべての預言の筋は、世の終わりには互いに並行する。

「『黙示録』において、聖書のすべての書は出会い、完結する。」『使徒行伝』585頁

背後から声を聞くすべての預言者は、世の終わりにおける神の民の描写に関してヨハネと一致している。ヨハネは、背後から自分に指示を与える声を聞いた。イザヤもまた、指示の声を聞いた。

それゆえ主は、あなたがたに恵みを施そうとして待ち、あなたがたをあわれもうとして立ち上がられる。主はさばきの神であるからだ。主を待ち望む者はみな幸いである。

民はエルサレムのシオンに住む。あなたはもう泣くことはない。あなたの叫び声に、主は大いに恵みを示される。主がそれを聞かれるとき、あなたに答えてくださる。たとえ主があなたがたに苦難のパンと苦しみの水を与えられても、あなたの教師たちはもはや隠されることはなく、あなたの目はあなたの教師たちを見る。あなたの耳は、後ろから「これが道だ。この道を歩め」ということばを聞く。右に向くときにも、左に向くときにも。イザヤ書 30章18-21節。

神の残りの民は、どの道を歩むべきかを指し示す背後からの声を聞く。彼らはそれに聞き従うかどうかを決めなければならない。ヨハネとイザヤにより表されているのは、世の終わりにおいて、主が遅れておられる間に主を待ち望む人々であり、イザヤは、主が裁きの神であるがゆえに遅れておられることを告げている。1798年のミラー運動の始まりから、日曜法におけるアドベンチズムの恵みの時の終わりに至るまで、神は天の聖所で裁きを執り行っておられる。裁きの期間に主を待ち望む者は祝福される、という約束がある。

待ち望むことによって祝福される神の民は、十人の乙女のたとえにおいて花婿を待つ乙女たちによって象徴されている。十人とも眠ってしまったが、真夜中に危機が訪れ、眠っていた乙女たちは二つの組に分けられた。一方の組は、背後からの声を聞き、どちらに進むべきかを教えるその声を見ようとして振り向いたが、もう一方は振り向いてその声を聞くことを拒んだ。「耳のある者は、御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」というメッセージがヨハネの黙示録全体を貫いているにもかかわらず。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」『大いなる論争』393。

ヨハネは、未来を理解するために過去に立ち返るアドベンチストの民を象徴している。彼らが、ヨハネがそうしたように「背後でことばを聞く」とき、そのことばには、この同じ出来事についてのイザヤの証しの中で与えられた教えも含まれている。イザヤの教えはこうであった。「これが道である。これに歩め。あなたが右に向くときも、左に向くときも。」ダニエル十二章の賢いおとめたちは、世の終わりにおける知識の増大を理解する。というのも、封印が解かれた命を与える知識を理解するために、彼女たちは御言葉の中を「行き巡った」からである。

しかしあなたは、ダニエルよ、終わりの時まで、これらの言葉を秘め、この書を封印せよ。多くの者があちこちを行き巡り、知識は増し加わるであろう。ダニエル書 12章4節

私たちが取り上げている預言者たちは、裁きが結論に達し、恩恵期間が閉じられる歴史におけるセブンスデー・アドベンチストを表している。賢い乙女として表されている者たちは、「これが歩むべき道だ」と背後から語る声を聞き、左にでも右にでも向くときにその道で彼らを導くと主は約束しておられる。「行き巡る」ことは、書が封印を解かれるときに賢い乙女たちがすることであり、聖書研究の象徴である。自然が教えるところでは、走るためにはまず歩くことを学ばなければならない。またイザヤの証言は、あなたが背後の声に耳を傾けるなら、旧約（左）に向かおうと新約（右）に向かおうと、御言葉の学びにおいて主があなたを導かれると言っている。聖書を開きなさい。主はその御声によってあなたを導かれる。しかし、世の終わりにおけるセブンスデー・アドベンチストにとっては、それはまた、聖書（左）を開くときにも、預言の霊（右）を開くときにも、主があなたを導かれることを意味する。

エレミヤの証言が加わると、歩むべき道はいつそう明確になる。

主はこう仰せられる。道に立って見よ、昔の道を尋ね求めよ、どこに良い道があるかを。そしてその道を歩め。そうすれば、あなたがたは魂の安らぎを見いだすであろう。しかし彼らは、「その道を歩まない」と言った。さらに、私はあなたがたの上に見張り人を立てて、「ラッパの音に耳を傾けよ」と言わせた。しかし彼らは、「聞き入れない」と言った。

それゆえ、諸国民よ、聞け。会衆よ、彼らのうちに何があるかを知れ。地よ、聞け。見よ、わたしはこの民に災いをもたらす。すなわち、彼らの思いの實を。彼らがわたしの言葉に耳を傾けず、わたしの律法にも耳を貸さず、それを退けたからである。エレミヤ書 6:16-19

この箇所には二種類の礼拝者がいる。一方の人々は、すべての「道」を吟味し、歩むべき「古い道」を選ぶ。彼らが他のあらゆる可能な「道」の中から「良い道」を選び取ることができたのは、背後からの声に耳を傾け、その声が『これが道だ。この道を歩め』と彼らに告げたからである。ヨハネは、背後からの声、すなわち「古い道」からの声を聞く者たちを代表している。

「主はこう言われる。道に立って見よ、昔からの道を尋ね、どれが良い道かを尋ね、それを歩め。」エレミヤ書6章16節

誰も、私たちの信仰の土台——私たちの働きの初めに、御言葉を祈り深く学び、啓示によって据えられた土台——を引きはがそうとしてはならない。私たちはこの土台の上に、この五十年の間、築き上げてきた。人は、新しい道を見だし、すでに据えられているものよりも強固な土台を据えることができると考えるかもしれない。しかし、これは大いなる欺瞞である。すでに据えられているもの以外の土台を、人は据えることができない。

過去に多くの人々が、新しい信仰の構築や新しい原理の確立に着手してきた。だが、彼らの築いたものはどれほど長く持ちこたえただろうか。ほどなく倒れた。岩の上に据

えられていなかったからである。

初代の弟子たちも、人々の言葉に直面しなければならなかったではないか。彼らは偽りの理論に耳を傾け、そのうえで、すべてを成し終えて、こう言って堅く立たなければならなかったのではないか。「人はだれも、すでに据えられているもの以外の土台を据えることはできない」。第一コリント 3:11

「それゆえ、私たちは最初の確信を終わりまで堅く保たなければならない。力ある言葉が、神とキリストによってこの民に送られ、彼らを世から、一つひとつの点で、現在の真理の澄んだ光の中へと導き出してきた。聖なる火に触れられた唇をもって、神のしもべたちはそのメッセージを宣べ伝えてきた。神の御告げは、宣べ伝えられた真理の真正さにその印を押してきた。」『Testimonies』第8巻、296、297頁。

しかし、エレミヤの系統にはもう一つの集団があり、彼がそう呼ぶ「会衆」は新しい信仰を象徴する家を建てたが、その家は岩の上に建てられていなかったために倒れる。その家とはセブンスデー・アドベンチスト教会のことであり、ヨハネは同じ教会を「サタンの会堂」と呼んでいる。

聞くことを拒むことは、彼の「言葉」と「律法」を退けることである。古い道に立ち返って歩むことに反抗し、また見張り人のラッパのメッセージを聞くことを拒んだために、エレミヤが「悪しき会衆」と特定する民に、神は災いをもたらそうとしている。神がラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会をどのように扱うかは、聖書の預言の主題である。預言者ホセアは、彼らがなぜ退けられるのかについて語るとき、「悪しき会衆」の特性に言及している。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

彼らは知識がないために退けられる。この知識は、終わりの時に封印が解かれるメッセージを表している。この箇所では、ご自分の民との契約関係を終わらせておられる。というのも、神は彼らを直接「わたしの民！」と呼んでおられるからである。彼らはキリストを退け、その律法を忘れたので、神のための祭司とはならない。神の民が神と契約を結ぶとき、神は彼らを祭司と王にされる。神が古代イスラエルと契約を結ばれたとき、モーセを通して次のように告げられた：

それゆえ、もしあなたがたがまことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての民のうちであって、わたしにとって特別な宝となる。全地はわたしのものだからである。あなたがたはわたしにとって祭司の国、聖なる国民となる。これがあなたがイスラエルの子らに語るべき言葉である。出エジプト記 19:5, 6。

神がキリスト教会と契約を結ばれたとき、ペテロを通して次のように語られた：

しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王なる祭司、聖なる国民、神の所有とされた民である。これは、あなたがたを暗闇からその驚くべき光へと召し出してくださった方の栄誉を告げ知らせるためである。あなたがたは、かつては民ではなかったが、今は神の民であり、憐れみを受けていなかったが、今は憐れみを受けている。第一ペテ

ロ 2:9, 10.

ペテロはこれらの節で、「かつては民でなかったが、今は神の民である」と述べ、神に選ばれた契約の民としての古代イスラエルからキリスト教会への移行について語っている。ユダヤ人が神と離縁したとき、主はキリスト教会と契約を結ばれた。両者とも、主と婚姻関係にあった間は祭司の国民と見なされた。

祭司として退けられることは、かつて契約の民であったことを示している。セブンスデー・アドベンチストは、アドベンチストの歴史の初めに主と契約を結んだ。荒野の教会は宗教改革から出てきたが、ミラー派のメッセージを退け、第一と第二の天使のメッセージの歴史の中で神と離縁した。最終的な決別は第二の天使の到来であり、教会はもはやキリストの娘ではなく、バビロンの娘となったと宣告された。その直後、真夜中の叫びの時に、神はご自身の新しい花嫁を契約の婚姻へと招いた。

古代イスラエルにおいて契約の象徴であったのは十戒の二枚の石板であり、霊的な現代イスラエルにおいてそれに相当するのは、1843年と1850年の図表に示されているハバククク二つの表である。啓示によって繰り返しラオディキアと指し示されてきた契約の民は、古き道を捨て、背後から聞こえる声に耳を傾けることを拒み、そのため主の口から吐き出されるに至って、古代イスラエルの終わりの歴史を繰り返す。なぜこのようなことが、主が「わたしの民」と呼ばれる人々に起こるのか。

アドベンチズムの経験を示す十人の乙女のたとえは、アドベンチズムの始まりに一度、そして終わりにもう一度、二度成就する。シスター・ホワイトは、そのたとえが文字どおりに成就してきたし、また文字どおりに成就すること、そしてそのたとえは第三の天使と同様に、常に現在の真理として理解されるべきであると教えている。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

ミラー派アドベンチズムは、1843年の失敗した予言と1844年10月22日の正しい予言の間に、たとえにおける「待ちの時」を成就した。この歴史の預言的な詳細は多く重要であるが、私が単に指摘したいのは、十人の乙女のたとえが、ホワイト姉妹が先ほど述べたように、第三の天使と直接結びついているということである。

1798年から1844年10月22日まで、第一の天使のメッセージは審判の開始を告知した。審判が始まる直前に、十人のおとめのたとえの「真夜中の叫び」が成就した。ゆえに、第三の天使が審判の終結を告げるとき、「真夜中の叫び」の告知は再び繰り返される。

プロテスタント諸教会が神のメッセージを退け、その結果バビロンの娘たちとなったという認識は、第二天使のメッセージの到来であり、まさに「文字どおり成就していた」そのたとえ話における待延の時の始まりでもあった。主は1843年には再臨なさらず、乙女たちを試し、祝福するために遅れられた。プロテスタント諸教会をバビロンの娘たちと特定する第二天使の宣言は、なおその墮落した教会にとどまっている人々に、そこから出

て、ミラー派とその預言理解の側に立つよう呼びかけるものであった。エクセターのキャンプ集会でサミュエル・スノーが、1844年10月22日が主の来臨の日であることを確証するために必要な証拠を示し、「真夜中の叫び」のメッセージは津波のように全土を席卷した。そして1844年10月22日の大失望において、第三天使が到来した。

これは初期の歴史を簡潔にまとめたもので、私たちが取り上げているテーマにより関係がありそうなくつかの点に絞るため、多くの点を割愛した。

これらの考察は次回の記事で続けます。